

# 『ロングマン英和辞典』の エラー・ノートについて

—日本人英語学習者の Common Errors と学習者コーパス

藤本 和子

1 『ロングマン英和辞典』(以下 *LEJD*) が2007年に、日本の英語学習者を対象として出版された。 *Longman Dictionary of Contemporary English* など、ロングマン社刊行の学習英英辞典は日本でもよく知られているが、英和辞典として編纂されたのはこの辞典が初めてである。 *LEJD* は *Longman Dictionary of Contemporary English* など既刊の辞典の翻訳版ではない。3億3,000万語のロングマン・コーパス・ネットワークを用い、現在実際に使われている自然な英語、そして、明確さを重視して編纂されたものである。本辞典収録ケースの記述によると、収録語数は約102,000語、例文数約83,000例である。 *LEJD* 編纂にはさらにもう2種類のコーパスが用いられている。1つはロングマン現代日本語コーパスである。このコーパスは、ロングマン・コーパス・ネットワークに基づいた「自然な英語」が、「自然な日本語」で表現できるよう *LEJD* の編纂にあたり開発されたものである。<sup>1)</sup> つまり、 *LEJD* は、大規模な英語コーパスと日本語コーパスをもとに作成された初の英和辞典と言えよう。さらにもう1種類のコーパスはロングマン学習者コーパスである。これは世界中の英語学習者が使った1,200万語以上の英語データからなるもので、そのうち、20%が日本人学習者の作文や試験答案などからのデータである。 *LEJD* はこのコーパスを利用し、日本人英語学習者にみられる common errors を ▲ をつけたエラー・ノートとして示している。このエラー・ノートには日本人英語学習者が犯しやすい間違

いについてだけでなく、不自然な英語についても注意を促している。<sup>2)</sup> イントロダクションに *LEJD* はアメリカ英語を中心として扱っているとあるように、見出し語の綴りや発音も、((米)) から ((英)) の順になっている。<sup>3)</sup> さらに、伝統的な SVO の文型表記を用いず、どの語がどの語と結びつくか、成句として掲載するなどコロケーションを重要視した表記がなされている。また、話し言葉、書き言葉で最も頻度の高い 3,000 語を選び、これらの見出し語を赤字で示し、頻度を示す記号をつけている。例えば、**S1** は英語の話し言葉で最も頻度の高い 1,000 語に入り、**W1** は英語の書き言葉においてそうであることを示す。そしてこれら 3,000 語の見出し語の語義には使用頻度の高い日本語が赤字で示されている。また、頻度の高い語のうち、多義語には、メニュー欄を設け、必要な意味をすばやく検索できるようにしてある。このように、正確で自然な英語を学習者が学びやすいように、様々な工夫がなされている。

本稿では、2つの目的から、ロングマン学習者コーパスを利用したエラー・ノートに注目し、その内容を分析する。1つは、エラー・ノートには誤った用法と共に正しい用法や解説も記されているため、その語法記述を分析することによって、英語語法の諸相を捉えるためである。もう1つは、*LEJD* のエラー・ノートの中には、これまで出版されてきた書籍、教科書、辞典などでよく目にする項目も散見されるため、*LEJD* のエラー・ノートにある語法項目に関して、日本人大学生が同じような error をどのくらい犯すか調査するためである。

2 エラー・ノートは、本文組み込みのノート、ボックス(囲み欄)に入ったノート、そして、*LEJD* 中央に設けられたコミュニケーションガイドセクション中のノートがある。その総項目数は 1,168 で、最初のものが 1,008 (うち発音に関するもの 306)、2番目のものが 140、3番目のものが 20 である。エラー・ノートをそのタイプによって分類すると、発音に関するもの、綴りに関するもの、語法に関するもの、社会・文化などに関するもの、フォーマルな表現や不自然な表現に関するものの 5 つに大きく分類できる。1つのエラー・ノートが複数のタイプに関する記述をもつものもあり、各タイプの項目数を述べることは避けることにする。

2.1 5つのタイプそれぞれの具体例を挙げてみよう。

### 発音に関するもの

**graduate**<sup>1</sup> / grædʒuət / ㊦ 名詞・形容詞との発音の違いに注意

**graduate**<sup>2</sup> / grædʒu:t / ㊦ 動詞との発音の違いに注意

**graduate**<sup>3</sup> / grædʒu:t / ㊦ 動詞との発音の違いに注意

この例のように品詞の違いによる発音の違いに注意を促すものも多く見られる。<sup>4)</sup>

### 綴りに関するもの

**accommodation**      **advertisement**

これらの語はThe Cambridge Learner Corpusによって、日本人学習者の“the five most common spelling errors”と認められたもののうちの2つと一致する。The Cambridge Learner Corpusによると、5つの語の誤りと順位は以下のようなものである。1 advertisement (advertisement) 2 recomend (recommend) 3 convinient (convenient) 4 accomodation (accommodation) 5 celemony (ceremony)。5位のもは、日本語では、/l/と/r/の区別をしないことから生じた誤りと言えよう。LEJDには、**accommodation**と**advertisement**以外の3語の綴りに関するエラー・ノートはない。

### 語法に関するもの

**industry**    *I've always wanted to work in **the** travel industry* (× *in travel industry*).  
以前からずっと旅行業界で働きたいと思っていた。特定の産業を指す場合はtheをつけてthe … industryとする。

**live**<sup>1</sup>        *My parents **live in** Tokyo* (× *live Tokyo*). 両親は東京に住んでいる。  
「(国・都市など)に住んでいる」の意味では地名の前にinをつける。

基本的な語法事項から、比較的上級学習者向けのものまである。

### 社会・文化に関するもの

**elderly** the elderlyは差別的な表現。代わりにsenior citizensが多く用いられる。

**email<sup>1</sup>, e-mail, E-mail** 「携帯電話のメール」の意味でemailは不可。textまたはtext messageを用いる。

### フォーマルな表現や不自然な表現に関するもの

**optional** sth is optionalよりもsb doesn't have to do sthのほうが日常よく用いられる：*You **don't have to** go to the meeting if you don't want to.* 会議に出たくなければ出なくてもいいです。

**submit** 「…を提出する」の意味では、hand inやturn inのほうが日常よく用いられる：*Did you **hand** your homework **in** on time?* 宿題は期限どおりに提出したの？

**2.2** また、エラー・ノートで取り上げられている項目から分かることは、日本人英語学習者のcommon errorsの特徴として、日本語の干渉や本来の英語とは異なって日本語に定着してしまった和製英語などが原因となっているものも多いと思われる。いくつか例を挙げてみよう。

### 日本語の干渉によるもの

**class<sup>1</sup>** *I go to two **English classes** (×two classes of English) a week.* 週に英語の授業が2クラスある。「英語の授業」の意味でa class of Englishは不可。an English classとする。

**group<sup>1</sup>** 「グループを作る」の意味でmake a groupは不可。get into a groupまた

は form a group を用いる: *We got into/formed* (× *made*) *groups of five*.  
私たちは5人ずつのグループになった。

**noise<sup>1</sup>** *We heard a loud* (× *big*) *noise*. 大きな物音が聞こえた。「(音が)大きい」の意味で *big* は不可。 *loud* を用いて, *a loud noise* とする。

日本語の「～の」につられて, 誤って *of* を用いたり, 「作る」や「大きい」という日本語により, コロケーションを間違えてしまう例である。

### 和製英語の影響によるもの

**image** *The company needs to improve its image* (× *image up*) *among young people*. その会社は若者に対してイメージアップを図る必要がある。「イメージアップする」の意味では *improve sb's image* を用いる。

**native<sup>1</sup>** *There are a lot of native speaker teachers* (× *native teachers*) *at the university*. うちの大学にはネイティブの教師がたくさんいる。「ネイティブの教師」の意味で *native teacher* は不可。 *native speaker* または *native speaker teacher* を用いる。

3 *LEJD* のエラー・ノートのうち, 語法に関するものについて, 他の辞典や語法書の記述と比較してみよう。比較する辞典, および語法書は, *Longman Dictionary of Contemporary English*<sup>4</sup>, *Oxford Advanced Learner's Dictionary*<sup>7</sup>, 『ジーニアス英和辞典』第4版, *Collins COBUILD English Usage*<sup>2</sup>, *Practical English Usage*<sup>3</sup> である。以下, *LDOCE*<sup>4</sup>, *OALD*<sup>7</sup>, *G4*, *CCEU*<sup>2</sup>, *PEU*<sup>3</sup> と表記する。(1) から (4) の番号直後の見出し語は *LEJD* のものである。記述中の下線は筆者による。

#### (1) **busy<sup>1</sup>**

**LEJD** *She was busy looking after* (× *busy in looking after*) *her baby*. 彼女

は赤ちゃんの世話を忙しかつた。busy in doingの形は不可。busy doingを用いる。

**G4** (項目 **busy**) 〈人が〉[…するのに] 忙しい [(in) doing] . . . She is ~ (in) cooking dinner. 彼女は夕食の支度で忙しい《◆inは省略されるのがふつう》。

「…するのに忙しい」という時に、G4では (in) doingのようにinがかっこに入れているが、LEJDでは、busy in doingの形は「不可」とある。LDOCE<sup>4</sup>とOALD<sup>7</sup>では、inはついていない。

**LDOCE<sup>4</sup>** (項目 **busy**<sup>1</sup>) **busy doing sth** Rachel's busy studying for her exams.

**OALD<sup>7</sup>** (項目 **busy**) ~ (doing sth) spending a lot of time on sth: James is busy practising for the school concert.

学習者にはinのつかないbusy doing sthの形を教えるべきではないか。

## (2) fever

**LEJD** 「熱がある」の意味ではhave a temperatureのほうが日常よく用いられる：He had **a temperature** and decided to go to bed. 彼は熱があったので寝ることにした。

**G4** (項目 **fever**) feverは発熱(状態)、temperatureは体温をいう：What's your temperature [× fever]? 熱は何度ですか / I have a temperature [× fever] of 38.3. 38度3分あります / I have a ~ [× temperature]. 熱があります / check [take] one's temperature [× fever] 熱を(計って)みる。ただし、I have a high ~ [temperature]. (高い熱がある)の場合は交換して用いることができる。

(項目 **temperature**) ((略式)) [a ~] (体の) 熱, 高熱... She has a high ~ [fever]. = She is running a high ~ [fever]. 彼女は高い熱がある / He 'is running [has got] a ~ of 101°F. 彼は今 (華氏) 101度の熱がある.

「熱がある」という意味で, *have a temperature* を用いることについて *LEJD* と *G4* で記述に違いが見られる. *G4* では高熱の場合を除いて *have a temperature* という表現を認めておらず, さらに項目 **temperature** では, この語を「(体の) 熱, 高熱」の意味で用いることは ((略式)) となっている. *LDOCE*<sup>4</sup> と *OALD*<sup>7</sup> には次のような記述, 例文がある.

*LDOCE*<sup>4</sup> (項目 **temperature**) to have a body temperature that is higher than normal, especially because you are sick: *Susie has a temperature and has gone to bed.*

*OALD*<sup>7</sup> (項目 **temperature**) *Does he have a temperature* (= is it higher than normal, because of illness)?

やはり, *G4* の *I have a temperature.* を不可とする記述には修正の余地があるのではないか.

### (3) **part**<sup>2</sup>

*LEJD* *She parted from* (× *with*) *him at the gate.* 彼女は門の所で彼と別れた. 「(人と) 別れる」の意味で *part* に続く前置詞に *with* は不可. *from* を用いる.

*G4* (項目 **part**) *part with O* 〈物〉を手放す, 売り払う; 〈人〉と別れる

*G4* は *part with* に「〈人〉と別れる」という意味を載せている (例文はない). *LDOCE*<sup>4</sup>, *OALD*<sup>7</sup>, *CCEU*<sup>2</sup> にはいずれも, *part with* は後ろに *sth* をとる形が掲載されている. *G4* が *part with* に「〈人〉と別れる」という意味を載せているのはやはり問題である

のではないだろうか.

#### (4) university

**LEJD** *More and more young people are going to university* (× *going to the university*). ますます多くの若者が大学へ進学している. *university*を「大学教育」「大学での授業」などの意味で用いる場合は冠詞の*a*や*the*は付けない. 単に*go to university*とする.

**G4** (項目 **university**) *go to (the) ~ = go to a ~* 大学へ行く《◆*the*は((英))では省略されるのがふつう; *a*は「ある大学に」, *the*は「その(話に出た)大学に」という意味; ((英))には*go to school*に準じた*go to ~*という言い方もある...》.

「大学へ(学ぶために学生として)行く」の意味で, *university*に*the*をつけるかどうかに関する問題である. *LDOCE*<sup>4</sup>と*OALD*<sup>7</sup>の記述を見てみよう. *PEU*<sup>3</sup>の記述も参考までに引用する.

**LDOCE**<sup>4</sup> (項目 **university**) *go to university* (= study at a university)

**OALD**<sup>7</sup> (項目 **university**) (*BrE*) *He's hoping to go to university next year.*

**PEU**<sup>3</sup> (項目 **articles (10)**) In American English, *university* . . . are not used without articles.

*She was unhappy at the university.*

これらの記述からして, *go to university*は本来, イギリス語法ということがわかる. イギリス語法がアメリカ語法に影響を与えつつあるのかどうか観察の余地があるだろう. この問題に関しては, *OALD*<sup>7</sup>の項目 **college**の語法欄も大いに参照するのがよからう.

4 LEJDのエラー・ノートの語法に関するものを、日本人大学生に行なった語法テストの結果とともに検討してみよう。

4.1 この語法テストは、2006年に、筆者自身が英文学科に所属する日本人大学生に行なったものである。主に2年生が履修する同じ授業名のクラス2クラスにおいて、テキストA *Unified Approach to American English* 中のUSAGE TIPSのセクションを、授業でカバーする前に、Elicitation Testとして、20のUnitを、5つのUnitずつ4回に分けて行なった。問題形式は、“Check the incorrect sentences.”の指示のもと、プリントされた英文を読んで、間違っている英文にチェックマークをつけるものである。受験者は、各回、語法15項目ずつ時間制限内に、辞典を用いずに解答した。

2つのクラスをAクラス、Bクラスとし、1回目から4回目のテストを1から4とする。それぞれのクラスの、それぞれのテストの試験実施年月、受験者数、ITPスコアに関するデータは以下の通りである。

	試験実施年月	受験者数	ITPスコア幅	ITPスコア平均	ITPスコア標準偏差
A1	2006年 4月	34	340-597 <sup>a</sup>	462.1	52.8
B1	2006年 4月	34	403-588	465.5	46.6
A2	2006年 6月	28	340-597 <sup>a</sup>	465.1	51.6
B2	2006年 6月	30	403-588	465.4	49.4
A3	2006年 9月	29	400-553	464.7	42.0
B3	2006年 9月	27	417-567 <sup>a</sup>	467.8	45.9
A4	2006年11月	21	400-553	469.0	46.2
B4	2006年11月	23	417-567 <sup>a</sup>	468.2	47.5

a TOEFL [CBT] 受験者1名のスコアを [PBT] に換算したのも含む。

A1からB2までが前期実施分，A3からB4までが後期実施分であり，前期と後期で各2クラスの履修者構成に一部変更がある．前期中，後期中は履修者構成は同じであるが，出欠席の関係で受験者人数に変化がある．A3からB4までで，前期後期とも同授業を受講し，語法テストを受けた学生数は，A3：27人，B3：26人，A4：19人，B4：23人である．

**4.2** 実施した語法テストの中から，*LEJD*のエラー・ノートで取り上げられた語法項目と同じものについて，語法テストでも日本人大学生がerrorを犯す傾向が見られるかどうか，検討してみよう．

最初に*LEJD*の記述を引用し，語法テストの例文と結果を載せる．それぞれの語法項目に関する試験実施年月，受験者数，ITPスコアに関するデータがわかるよう，A1からB4を付す．結果はそれぞれのクラスの正解者数，正解率，そして2クラスを合わせた正解率を [ ] に入れて表示する．

(1) **car** 「車に乗る」の意味でget on the carは不可．get in the carを用いる．get on the carは「車の屋根の上に登る」という意味．しかし，「バス〔電車，飛行機〕に乗る」はget on a bus/train/planeを用いる．

#### 語法テスト

× We got on the car and left the town.

[A4：6 (28.6%) B4：8 (34.8%) **31.8%**]

× We got in the train for Kyoto.

[A4：14 (66.7%) B4：13 (56.5%) **61.4%**]

We got on the train for Kyoto.

[A4：18 (85.7%) B4：17 (73.9%) **79.5%**]

**car** 「彼女の車で」の意味でby her carは不可．in her carにする：*Pam took us in* (× *by*) *her car*. パムが車で送ってくれた．

語法テスト

We went to church by car.

[A2:28 (100.0%) B2:29 (96.7%) **98.3%**]

× We went to church by Tony's car.

[A2:7 (25.0%) B2:9 (30.0%) **27.6%**]

語法テストで *got on the train* は全体で79.5%の学生が正しいと解答しているが、  
× *got on the car* に正解した学生は31.8%と低めである。また、学生の *by car* の使用に関する正解率は高いが、× *by Tony's car* に正解した学生が27.6%と低い。これらのことから、*LEJD*のエラー・ノートは役立つと言えよう。

(2) **despite** despiteと *in spite of* を混同しないように注意。despiteは前置詞なので *of* を伴わず、名詞または動名詞を目的語とする：***Despite*** (× *of*) ***being rich and famous, he's not very happy.*** 富と名声はあっても、彼はあまり幸せではない。

語法テスト

× Despite of the late start, we made it in time.

[A3:11 (37.9%) B3:11 (40.7%) **39.3%**]

*Despite* と *in spite of* の混同による error であるが、正解率は39.3%と低めである。従来の品詞を用いた教え方、つまり、*despite* が前置詞であることを学習者に徹底させることに意味があるのではないか。

(3) **enter** 「クラブやサークルに加入する」の意味では *enter* は不可。joinを用いる：  
*I want to join* (× *enter*) *the tennis club.* テニスクラブに入会したい。

語法テスト

× John entered the judo club last month.

[A1 : 15 (44.1%) B1 : 19 (55.9%) **50.0%**]

John joined the judo club last month.

[A1 : 28 (82.4%) B1 : 27 (79.4%) **80.9%**]

*Joined the judo club*を正しいと解答した学生が80.9%であり、正解率は高い。しかし、×*enter the judo club*に正解した学生が50.0%であることから、この場合*join*と*enter*の両方が使用できると考える学生がいる可能性もあり、もしそうであるならば、LEJDのエラー・ノートは学生に役立つと言えるだろう。

(4) **gas station** 英語で「ガソリンスタンド」の意味で *gasoline stand* は不可。 *gas/filling station* を用いる。

語法テスト

× The next gasoline stand is fifty miles up the road.

[A3 : 23 (79.3%) B3 : 17 (63.0%) **71.4%**]

和製英語による error である。正解率が71.4%と低くはないのは、「ガソリンスタンド」が和製英語であることが、様々な辞典や語法書で取り上げられているので、それを知っている学生が多いためかもしれない。語法テストの和製英語に関するもので最も正解率が低かったのは、「プリント」であった。×*The instructor gave us prints to study*. [A1 : 11 (32.4%) B1 : 11 (32.4%) **32.4%**]. LEJDには、「プリント」に対するエラー・ノートはない。

(5) **half**<sup>1</sup> *We've spent half of our money* (× *half of money*) *already*. お金の半分をすでに使ってしまった。 *Half of the children* (× *Half of children*) *passed the test*. 子供たちの半数がテストに合格した。「…の半分」の意

味でhalf ofに続く名詞にはtheやmyなどをつける。

実施した語法テスト項目に*half of*に続く名詞の形を問う問題がなかったため、ここでは*all of*に続く名詞の形をたずねる問題のテスト結果を参考までに見てみよう。

語法テスト

All of my friends have a bad cold.

[A1 : 29 (85.3%) B1 : 27 (79.4%) **82.4%**]

All my friends have a bad cold.

[A1 : 17 (50.0%) B1 : 19 (55.9%) **52.9%**]

LEJDのエラー・ノートは、数量代名詞+ofの後ろに限定詞のついた名詞がくることへの注意を促すものである。確かに、日常、学生の作文などを読んでみると限定詞が忘れられるerrorをよく目にする。しかし、今回の語法テストの結果では、82.4%の学生が*all of*の後ろに限定詞のついた名詞がくる形をもつ文、*All of my friends have a bad cold.*を正しいとみなしている。一方、*of*を用いない*All my friends have a bad cold.*の文を正しいとみなした学生は52.9%でこちらのほうが低いことも興味深い。CCEU<sup>2</sup> (allの項)には、“You can put **of** between **all** and a determiner. This use is more common in American English than in British English.”とあり、学生がアメリカ英語に慣れているためこのような結果になった可能性も考えられる。LEJDにおいても、*half of*の*of*のない形についても記述があってもよいのではないだろうか。

(6) **in**<sup>1</sup> 具体的な日付を表すときはonを用いる：*I began work on (×in) August 4th.* 8月4日から仕事を始めました。

語法テスト

× What did you send for in August 27?

[A2 : 17 (60.7%) B2 : 26 (86.7%) **74.1%**]

×Mrs. Smith passed away in the morning of July 20.

[A2 : 19 (67.9%) B2 : 15 (50.0%) **58.6%**]

語法テストでの×in August 27の正解率は74.1%で、4回の語法テストの総項目中、低いほうではないと言えよう。日本では、中学生、高等生用参考書などでも繰り返し出てくる項目だからではないだろうか。

(7) **tell** *She told me she can't come* (×*told she can't come*) *on Friday*. 彼女は金曜日に来られないと言った。事実・情報などを伝える場合には、tellの直後に (that) 節は不可。だれに伝えるかを明確にして「tell+人+(that) 節」の構文にする。

**語法テスト**

Betty told me Jim came to the party.

[A2 : 11 (39.3%) B2 : 18 (60.0%) **50.0%**]

Betty told me that Jim came to the party.

[A2 : 26 (92.9%) B2 : 29 (96.7%) **94.8%**]

×Betty told that Jim came to the party.

[A2 : 13 (46.4%) B2 : 16 (53.3%) **50.0%**]

語法テストでは94.8%の学生が*Betty told me that Jim came to the party.*を正しいとみなしているが、×*Betty told that Jim came to the party.*の正解率が50.0%であることからして、*tell*が「tell+人+(that) 節」の構造をとることを本当の意味で習得していないのではないだろうか。そのような学習者にとって、LEJDのエラー・ノートは役に立つと言えるかもしれない。さらに、語法テストの結果から言えることは、第1文と第2文の結果を見て、「tell+人+(that) 節」の接続詞*that*があるか否かで、正解率が異なっており、*that*がある場合の94.8%の正解率に対して*that*がない場合の正解率は50.0%である。学生が*that*のない形に慣れていないためだろうか。

4.3 次に、LEJDのエラー・ノートにはないが、語法テストで正解率の比較的低かった項目や、解答にばらつきのあった項目をいくつか挙げておくことにしよう。

(1) 代名詞に関するもの

The baby cries a lot when it is hungry.

[A4 : 8 (38.1%) B4 : 10 (43.5%) **40.9%**]

(2) 動詞のとり構造に関するもの

× Bob planned that he would sing at the party.

[A4 : 9 (42.9%) B4 : 4 (17.4%) **29.5%**]

× Would you mind that you open the door?

(*mind*が「…をいやがる」の意味の場合)

[A4 : 10 (47.6%) B4 : 6 (26.1%) **36.4%**]

(3) 冠詞に関するもの

× Milk in the refrigerator is for you. Help yourself.

[A4 : 1 (4.8%) B4 : 1 (4.3%) **4.5%**]

4.4 LEJDのエラー・ノートにある語法項目に関して、日本人大学生が、同じようなerrorをどの程度犯すか、語法テストの結果と比較分析した。語法テストで用いた例文がLEJDのものと同じでないこと、テスト形式が1種類であること、そしてなにより、データ収集の規模などからしてこの語法テストは比較するデータとしては決して十分なものとは言えない。しかしながら、今回のLEJDのエラー・ノートと語法テストとの比較分析で、語法項目によってerrorを犯す確率が高いものと低いものがあることは明らかである。つまり、LEJDはじめ、英語学習者のcommon errorsを扱う辞典や語法書の基づく学習者コーパスが、どのような学習者を主体としてどのようにデータを収集分析するか、学習者の年齢、レベル、継続英語学習歴、話し言葉と書き言葉それぞれのトピックなどによってコーパスがもつcommon errorsのデータは

その様相を変えると言えるのではなからうか。<sup>5)</sup>

5 英語母語話者にとって当然の事柄が、外国人英語学習者にとっては必ずしもそうではないものも多い。「風邪薬」は *cough medicine* というが、なぜ、*cough drug* とは言わないのだろうか。*Medicine* も *drug* も日本語は「薬」である。尤も、通例、*drug* の第一義は「麻薬」である。アメリカ人の同僚の先生にこの2つの語の用法の違いについてたずねたところ、「*medicine* は、より “specific” な意味での『薬』で、*drug* は、より “general” な意味での『薬』ではないか」との返答であった。今後、こうした学習者の英語に対する「なぜ」という素朴な疑問に答えてくれるような辞典の記述に出会うのも楽しみである。

英語が世界中の様々な場面で、いわば国際語としての役割を果たすようになった現代、英語学習者のための英語辞典は不可欠なものである。日本人英語学習者を対象とした *LEJD* は、辞典編纂の歴史上両期的なことであるだけでなく、日本の英語教育にとって非常に意義深いことだと言えよう。今後の学習者コーパスのさらなる充実や活用で、学習者に役立つ英語辞典の一層の発展に期待を寄せたいものである。

## Notes

- 1) ロングマン現代日本語コーパスは、独立行政法人国立国語研究所、独立行政法人通信総合研究所、東京大学大学院情報理工学系研究科との共同開発で、書き言葉コーパス4,000万語と話し言葉コーパス1,000万語からなる。
- 2) さらに、エラー・ノートの中には、発音に関するものもある。これらは、形や品詞の違いによる発音・アクセントの違いから、学習者が間違いを犯しやすいものであり、学習者には役立つと思われる。
- 3) ただし、例えば **cancel** の項目には  
▲「(試合などが) 中止になる」の意味では *be cancelled* よりも *be off* のほうが日常よく用いられる....  
との記述があり、*cancelled* という綴りが用いられているが、アメリカ英語では通例 *canceled* が用いられる。エントリー **gypsy** でも記述中に *traveller* の綴りが用いられているが、アメリカ英語では通例 *traveler* と綴られる。
- 4) 品詞の違いによる発音の違いについてのノートで、**misuse**<sup>1</sup> / mɪsʒús / 名 **misuse**<sup>2</sup> / mɪsʒúz / 動 と **use**<sup>1</sup> / ju:z / 動 **use**<sup>2</sup> / ju:s / 名 にはノートがあるが、**excuse**<sup>1</sup> / ɪkskjúz / 動 **excuse**<sup>2</sup> / ɪkskjús / 名 にはない。

5) *LEJD*のquestion<sup>1</sup>の項目には,

▲ *Can I ask you a question* (× *ask you question*)? 質問してもいいですか, questionは数えられる名詞なので不定冠詞aをつけてa questionとする.

とあるが, 英語学習の中で, このような英文を使用する頻度は自然に高くなるであろう. 使用頻度が高くなれば, errorを犯す確率も高くなる可能性がある.

## References

Ferrasci, F. W. and M. Someya. 1987. *A Unified Approach to American English*. Tokyo: SEIBIDO.  
Sinclair, J. (ed.). 2004. *Collins COBUILD English Usage*. 2nd ed. Glasgow: HarperCollins. (*CCEU*<sup>2</sup>)  
Swan, M. 2005. *Practical English Usage*. 3rd ed. Oxford: Oxford University Press. (*PEU*<sup>3</sup>)  
*CAMBRIDGE CONNECTION*. Japan Edition. #01. 2007. Tokyo: Cambridge University Press.

## Dictionaries

*Longman Dictionary of Contemporary English*. 4th ed. 2003. Harlow: Pearson Education. (*LDOCE*<sup>4</sup>)  
*Oxford Advanced Learner's Dictionary of Current English*. 7th ed. 2005. Oxford: Oxford University Press. (*OALD*<sup>7</sup>)  
『ジーニアス英和辞典』第4版. 2006. 小西友七・南出康世 (編). 東京: 大修館書店. (G4)  
『ロングマン英和辞典』2007. Harlow: Pearson Education. (*LEJD*)